

既ニ身體障害ヲ存スル者負傷又ハ疾病ニ因リ同一部位ニ付障害ノ程度ヲ加重シタルトキハ其ノ加重セラレタル障害ノ該當スル障害扶助料ノ金額ヨリ既ニ存シタル障害ノ該當スル障害扶助料ノ金額ヲ差引キタル金額ヲ支給スベシ

第八條 職工死亡シタルトキハ工業主ハ遺族又ハ職工ノ死亡當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者ニ賃金四百日分其ノ金額男子ニ在リテハ三百二十圓、女子ニ在リテハ二百圓ニ滿上ノ遺族扶助料ヲ支給スヘシ  
チザルトキハ夫々三百二十圓又ハ二百圓)

第九條 職工死亡シタルトキハ工業主ハ葬祭ヲ行フ遺族又ハ職工ノ死亡當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者ニシテ葬祭ヲ行フ者ニ賃金三十日分（其ノ金額三十圓ニ滿チザルトキハ三十圓）以上ノ葬祭料ヲ支給スヘシ

第十三條 第五條ノ規定ニ依リ本人ニ支給スル費用及休業扶助

料ハ毎月一回以上之ヲ支給スヘシ

障害扶助料ハ職工ノ負傷又ハ疾病ノ治療後遲滞ナク之ヲ支給

障害扶助料ハ職工ノ負傷又ハ疾病ノ治療後遲滞ナク之ヲ支給

スベシ但シ工業主ガ引續キ雇傭ナル場合ニ於テ本人ノ承諾

助料及葬祭料ハ職工ノ死亡後遲滞ナク之ヲ支給スヘシ但シ障

害扶助料及遺族扶助料ハ地方長官ノ許可ヲ受ケ延滞スルコトヲ

得テ之ヲ支給スルコトヲ得

遺族扶助料及葬祭料ハ職工ノ死亡後遲滞ナク之ヲ支給スベシ

工業主地方長官ノ許可ヲ受ケタルトキハ前二項ノ規定ニ拘ラ

ズ障害扶助料及遺族扶助料ヲ數回ニ分割シテ支給スルコトヲ得

第十四條 第五條ノ規定ニ依リ扶助ヲ受ケ又ハ健康法險法ニ依

リ療養ノ給付若ハ療養費ノ支給ヲ受クル職工療養開始後三年

ヲ經過スルモ負傷又ハ疾病治療セザルトキハ工業主ハ賃金五

五百四十日分（其ノ金額男子ニ在リテハ四百五十圓、女子ニ在リテハ二百七十圓以上ノ打切扶助料ヲ支給シ以後本章ノ規定ニ依ル扶助ヲ爲ササルコトヲ得）  
百七十圓）

第十四條ノ二 工業主豫メ地方長官ノ許可ヲ受ケタルトキハ工業主及職工ノ出捐スル共濟組合ノ爲シタル給付ノ限度ニ於テ之ニ相當スル本令ノ扶助ヲ爲スコトヲ要セズ

地方長官必要ト認ムルトキハ前項ノ許可ヲ取消スコトヲ得

第十八條 地方長官ハ職權ヲ以テ又ハ申請ニ因リ職工ノ負傷、疾病若ハ死亡ノ原因、第七條各號ニ掲クル身體障害ノ程度其ノ他扶助ニ關スル事項ニ付之ヲ審査シ及事件ノ調査ヲ爲スコトヲ得

別表

前項ノ場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ醫師ヲシテ診斷又ハ檢案セシムルコトヲ得

第二十七條 未成年者若ハ女子カ工業主ノ都合ニ依リ解雇セラレ又ハ第五條若ハ第六條ノ規定ニ依リ扶助ヲ受クル職工、業務上負傷シ若ハ疾病ニ罹リ健康保險法ニ依リ療養ノ給付若ハ療養費ノ支給ヲ受クル職工若ハ別表第八級以上第七條第一號第二號ニ該當スル職工解雇セラレ解雇ノ日ヨリ十五日内ニ歸郷スル場合ニ於テハ工業主ハ其ノ必要ナル旅費ヲ負擔スヘシ第十四條ノ規定ニ依リ扶助ヲ廢止セラレタル者廢止ノ日ヨリ十五日内ニ歸郷スル場合亦同シ

第十八條ノ規定ハ前項ノ旅費ニ關シ之ヲ準用ス

昭和十一年十一月

工場法施行令中改正勅令案逐條說明

逐條說明目次

一	第六條	休業扶助料
二	第七條	障害扶助料
三	第八條	遺族扶助料
四	第九條	葬祭料
五	第十三條	障害扶助料支給延期
六	第十四條	打切扶助料
七	第十四條三	共濟組合
八	第十八條	
九	第二十七條	歸郷旅費

工場法施行令中改正勅令案逐條説明

第六條

本條ハ休業扶助料ヲ定メタルモノニシテ今回ノ改正トスルハ

一、休業扶助料ノ額上レヲ削リ百分六十トスルト共ニ支給百  
八十日ヲ超スルモ百分四十ニ減額セサルコトトシタルコト

工場ニ於テハ現在休業扶助料ハ標準賃金ノ百分ノ  
六十日以上ニシテ其ノ支給百八十日ヲ超スルトキハ百分  
ノ四十迄ニ減ジ得ルコトトナリ居レルモ、休業扶助料

ハソノ支給百八十日ヲ超ヘタルニ因リ之ヲ減額スベキ  
理由存セザルヲ以テ之ヲ労働者災害扶助法ノ例ニ  
依リ百八十日ヲ超ユルモ百分ノ四十二減額セザルコトト  
スルト共ニ百分ノ六十以上トアルヲ百分ノ六十以上ト削リ  
百分ノ六十トセリ。  
付キテハ後出第八條遺族扶助料ノ項参照)

(労働者災害扶助法施行令第五條)



二 獨身入院者ニ對スル休業扶助料ノ減額

工場ニ於テハ現在労働者ヲ病院ニ收容シタル場合ニ本  
人ノ收入ニ依リ生計ヲ維持スル者ナキトキト雖モ一樣ニ  
百分ノ六十以上ノ休業扶助料ヲ支給スルコトトナリ居  
レルモ之ヲ労働者災害扶助法施行令ノ例ニ依リ  
右ノ場合ニ於テハ標準賃金ノ百分ノ二十ニ減ズルコトトセ  
リ

(労働者災害扶助法施行令第五條)

## 第七條

本條ハ障害扶助料ヲ定メタルモノナルガ今回ノ改正ハ

一 障害等級ヲ別表ヲ以テ十四級ニ具體的ニ細分シカ以上

スルト共ニ障害扶助料ノ最高級ヲ標準賃<sup>金</sup>ハ六百日

分、最下級ヲ標準賃<sup>金</sup>ハ二十日分トシ且各等級ノ障害

扶助料ニ夫夫最低金額ヲ設ケ「以上」ヲ削リタルコト

工場ニ於テハ現在障害扶助料ノ等級ヲ抽象的ニ四級ニ別

チ居ルモ、障害ノ程度ヲ明カニシ實際ノ取極上ノ紛議ヲ

避ケルタメ労働者災害扶助法施行令別表ノ例ニ依リ  
障害ノ等級ヲ十四級ニ具體的ニ區分シ「以上」ヲ削  
ルト共ニ障害扶助料ノ増額シ最高級ハ標準賃金  
六百日分トシ各等級ノ障害扶助料ニ最低金額ヲ  
定メ「以上」ヲ削リタリ

参照

別表身体障害等級表案

労働者災害扶助法施行令第六條

及別表身体障害等級表

ニ従来ノ勞務ニ服スルコト能ハザルトキハ標準賃金、百  
八十日分ヲ下ルコトヲ得ザル旨ノ規定ヲ設ケタルコト

(改正案第五條第一項但書)

工場ニ於テハ現在「従来ノ勞務ニ服スルコト能ハザルモ」(三付テハ)標準

準賃金ノ百八十分以上ノ障害扶助料ヲ支給スルコ

トトナリ居レルヲ以テ障害ノ程度ヲ別表ヲ以テ十四級

ニ具体的ニ区分シタル場合ニ於テモ同一趣旨ノ規定ヲ設

クルコトトセリ。

参照

工場法施行令第七條第三号

三 身体障害ニ以上存スル場合ノ規定ヲ設ケタルコト

(改正案第五條第三項及第三項)

工場ニ於テハ現在身体障害ニ以上存スル場合ノ規定  
ナキヲ以テ労働者災害扶助法施行令ノ例ニ依リ原則  
トシテ重キ身体障害ノ該當スル等級ニ依リ、特別  
ノ場合ニ於テハ一級乃至三級繰上ケルコトトセリ。

但シ其ノ金額ハ各身体障害ノ該當スル等級ニ依ル障  
害扶助料ノ金額ヲ合算シタル額ヲ超ヘサルコトトセリ

参照 労働者災害扶助法施行令第六條第三項及第三項

四 別表以外ノ身体障害ニ付規定ヲ設ケタルコト

(改正案第五條第四項)

障害扶助料ノ等級ヲ労働者災害扶助法施行令別表  
ノ例ニ依リタルヲ以テ別表ニ掲グルモノ以外ノ身体障害  
存スル者ニ関スル規定ヲモ労働者災害扶助法施行令  
例ニ依リ設クルコトトセリ

参照

労働者災害扶助法施行令第六條  
第四項

五 既ニ身体障害ヲ存スル者が同一部位<sup>ニ付</sup>障害ヲ加重シ  
タル場合ノ規定ヲ設ケタルコト

(改正案第五條第五項)

工場ニ於テハ現在斯ル場合ノ規定ナキヲ以テ労働者災  
害扶助法施行令ノ例ニ依リ同一部位ニ付障害ヲ加  
重シタル場合ノ規定ヲ設ケタルコトトセリ

第八條

本條ハ遺族扶助料ヲ定メタルモノニシテ今回  
ノ改正ハ

一 遺族扶助料ノ金額三百六十日分以上ヲ

四百日分トシタルコト

工場ニ於ケル災害ハ近年著シク増加ノ傾向

ニ在リ然ルニ現在遺族扶助料ノ金額ハ  
賃金三百六十日分以上ハ實際上ハ多クノ場



令ニ於テ三百六十日分ヲ支給スルニ過ギズ  
ニシテ勞働者ノ遺族ノ救濟ノ目的ヲ達ス  
ルニ充分ナラザルモノアルヲ以テ之ヲ四百日  
分ニ引上グルト共ニ扶助關係ヲ明確ナラ  
シメ、ソノ迅速ナル解決ヲ期スルタメ勞働  
者災害扶助法施行令ノ例ニ依リ「以上」  
ヲ削ルコトトセリ。

尚同様ニ 休業扶助料、障害扶助料、

葬祭料及打切扶助料ノ金額ニ付テモ  
「賃金百分ノ六十以上」又ハ「賃金何日分  
以上」トアルモスベテ「以上」ヲ削ルコトト  
セリ。(第六條、第七條、第八條、第九條、  
第十四條)

參照 勞働者災害法施行令第五條、  
第八條、第九條、第十一條

二、遺族扶助料ニ付男三百二十圓女二百圓ノ

最低金額ヲ設ケタルコト

現行法ハ遺族扶助料ノ金額ヲ定ムルニ當該  
勞働者ノ賃金ヲ標準トシテ其ノ何日分以上  
ト定メタリ。從ツテ賃金極メテ低額ナル  
勞働者ニ在リテハ其ノ遺族扶助料僅ニ  
百圓ニ過ギザルモノアル状態ニシテ、扶助  
ノ目的ヲ達シ得ザルヲ以テ標準賃金界

子八十錢 女子五十錢ノ程度ヲ以テ最低金額ヲ定  
メタリ。 現在葬祭料ニ付テハ貸金三十日分ナ  
ルモ其ノ金額三十圓ニ滿チザルトキハ三十圓トスル  
旨ノ規定アリ

第九條

本條ハ葬祭料ヲ規定シタルモノニシテ今回ノ改正ハ

一「貸金三十日分以上」トアルヲ「貸金三十日分」

ニ改メタルコト

障害扶助料及遺族扶助料ニ於テ「以上」ヲ

削タルト同一趣旨ニ依リ葬祭料ニ付テモ「以上」

ヲ削ルコトトセリ

第十三條

本條ハ扶助料ノ支給時期ヲ規定セルモノニシテ今回ノ

改正ハ

(一) 雇傭期間中障害扶助料ノ支給ヲ延期シ得ルコ

トト<sup>シタ</sup>ルコト

現在工場ニ於テハ第十三條本文ノ規定ニ依リ障害  
扶助料ハ職工ノ負傷又ハ疾病ノ治癒後遲滞ヲク  
支給スベキコトトナリ居レルモ、勞働者災害扶

助法<sup>ノ</sup>例ニ依リ工業主が當該職工ヲ引續キ雇傭  
スル場合ニ於テ職工ノ承諾アリタルトキハ雇傭期  
間中障害扶助料ノ支給ヲ延期シ得ルコトトシ、  
工業主<sup>及</sup>職工ノ便益ヲ圖ルコトトセリ。現在勞  
働者災害扶助法施行令ニ於テ従来ノ賃金ヲ支給  
スルコトヲ條件トセルモ斯クテハ解雇ヲ防止セン  
トスルノ目的ヲ達シ難キヲ以テ之ヲ除クコトトセ  
リ。尚本改正ニ伴ヒ條文ノ整備ヲナシタリ

## 第十四條

本條ハ打切扶助料ヲ規定セルモノニシテ今回ノ改正ハ

一、打切扶助料ニ最低金額ヲ定ムルト共ニ「以上」ヲ削ル

コトトシタルコト

第八條ニ於ケル遺族扶助料ト同一ノ趣旨ニ依リ打切扶助

料ニ男子四百三十圓、女子二百七十圓ノ最低金額ヲ定ムル

ト共ニ「五百四十日分以上」トアルヲ「以上」ヲ削リ「五百四十日分」トセリ。



第十四條ノ二

本條ハ昭和十年法律第十九號工場法中改正法律ニ關聯シテ新~~設~~設ケラレタルモノナリ

昭和十年法律第十九號工場法中改正法律ハ工場法ニ基ク工業主ノ扶助責任ト民法上ノ損害賠償責任トノ關係ニ付規定ヲ設ケ（第十五條ノ二）、工業主ガ工場法ニ基キ扶助ヲ為シタルトキハ、工業主ハ其ノ扶助ノ價額ノ限度ニ於テ民法ノ規定ニ依ル損害賠償ノ責

ヲ免レ、又工業主及職工ノ出捐スル共済組合ガ勅令  
ノ定ムル所ニ依リ工業主ヲシテ扶助ヲ爲スヲ要セザラ  
シムルガ如キ給付ヲ爲シタルトキハ、工業主ハ其ノ給付  
ノ價額ノ限度ニ於テ民法ノ規定ニ依ル損害賠償ノ  
責ヲ免ルルコトトシ以テ工業主ヲシテ同一ノ原因ニ付  
ニ重ノ負担ヲ負ハシメザルコトトセリ

而シテ共済組合ガ如何ナル給付ヲ爲シタルトキ工  
業主ガ扶助ヲ爲スヲ要セザルカヲ勅令ノ規定ニ委任

シタルヲ以テ本條ハ之ヲ規定セントスルモノナリ

即チ工場ニ於テハ従来工業主及職工ノ出捐スル共  
済組合ノ為シタル給付ヲ認ムル規定ナキヲ以テ勞働  
者災害扶助法施行令ノ例ニ依リ新ニ規定ヲ設ケ

「工業主豫メ地方長官ノ許可ヲ受ケタルトキハ工業  
主及職工ノ出捐スル共済組合ノ為シタル給付ノ限度  
ニ於テ之ニ相當スル本令ノ扶助ヲ爲スコトヲ要セ」  
ザルコトトセリ。

工業主が本法ニ依リ負担スル扶助責任ヲ職工ニ轉  
嫁スルコトヲ防止スル為豫メ地方長官ノ許可ヲ受  
クルコトヲ必要トシタルガ地方長官ハ労働者災害  
扶助法施行令ノ場合ト同ジク、工業主ノ出捐スル額  
が工業主が本法ニ依リ職工ノ業務上ノ負傷疾病及死  
亡ニ對シ為スベキ給付ノ總額及其ノ組合ノ事務費ノ  
相當部分ヲ下ラザルコトガ確認セラレタル場合ニ於テ  
ノミ許可ヲ為スベキコトトセントス

尚第二項ニ於テ「地方長官必要ト認ムルトキハ前項ノ許可ヲ取消スコトヲ得ル」コトトシ以テ共濟組合ノ業績ヲ調査シソノ監督ヲ為スコトトセリ。

第十八條

本條ハ扶助ニ關スル事項ニ付テノ地方長官ノ審査及調  
停ヲ規定セルモノニシテ從來第七條ニ於テ抽象的ニ四  
號ニ區分セラレタル障害ノ程度ヲ<sup>今回</sup>別表ヲ以テ十四級ニ  
具體的ニ區分スルコトトシタルヲ以テ本條中「第七條  
各號」トアルヲ「別表」ニ改ムルコトトセリ

第二十七條

本條ハ歸郷旅費ヲ定メタルモノニシテ今回~~改正~~歸郷旅費ノ支給ヲ受クベキモノノ障害ノ程度ヲ改メタリ。

従来工場ニ於テハ歸郷旅費ハ終身勞務ニ服スルコト能ハザルモノハ障害扶助料標準賃金三百六十日分以上ノ障害ヲ残シタルモノニ對シ支給スルコトトナリ居レルモ、今回障害ノ程度ヲ別表ヲ以テ十四級ニ具體的ニ區分スルト共ニ勞働者災害扶助法施行令

ノ例ニ依リ、第八級ハ障害扶助料標準賃金百八十日  
分ノ以上ニ該當スルモノニ歸御旅費ヲ支給スルコト  
ニ改メタリ。

参照

労働者災害扶助法施行令第十三條



現行工鑛業法  
 労働者災害扶助法  
 工場法施行令(勅令)  
 二基ク扶助ノ内容比較表

扶助事項/法令別	労働者災害扶助法	工場法施行令(勅令)	鉱夫等役扶助規則(省令)
休業扶助料	百分ノ六十 <small>日々雇入等ノ者ニハ特定期間ノ間ノ例外、病院收容ノ場合百分ノ二十ノ例外</small>	百分ノ六十以上 其ノ後 百分ノ四十以上	全上
障害扶助料	第一級ヨリ第十四級迄ニ區分シ 五百四十日分ヨリ二十日分迄トス 障害加重場合ノ規定ヲ存ス	終身勞務ニ服スルコト能ハサルモノ 三百六十日分以上 從來ノ勞務ニ服スルコト能ハサルモノ 百八十日分以上 引續キ從來ノ勞務ニ服スルコト得ルモノ 四十日分以上	全上
遺族扶助料	三百六十日分	三百六十日分以上	全上
葬祭料	三十日分(平均未滿ハ三十日トス)	三十日分(全上)以上	全上
打切扶助料	療養開始後一年 五百四十日分 重過失ノ場合 二百七十日分	療養開始後三年 五百四十日分 療養ノ給付又ハ休業扶助料ヲ受ケル者 療養ノ中ニシテ障害扶助料又ハ打切扶助料ニ受ケル者ニ支給ス	全上
歸郷旅費	八級以上ノ障害扶助料若ハ打切扶助料ヲ受ケル者ニ支給ス	療養ノ給付又ハ休業扶助料ヲ受ケル者 療養ノ中ニシテ障害扶助料又ハ打切扶助料ニ受ケル者ニ支給ス	全上

共済組合、  
シタル給付

認  
ム

認ムル規定ナシ

合  
上

〇.六 〇.四 〇.三 〇.二 〇.〇六 〇.〇四 〇.〇三 〇.〇二 〇. 失明

〇.六									〇.四									〇.三									〇.二									〇.〇六									〇.〇四									〇.〇三									〇.〇二									〇. 失明									障害程度	
九級									八級									七級									六級									五級									四級									三級									二級									一級									現行法	兩眼、場合
九級									九級									六級									四級									二級									一級									改正案	兩眼、場合																											
十三級									十二級									十一級									十級									九級									八級									現行法	一眼、場合																											
十三級									十三級									十級									九級									八級									改正案	一眼、場合																																				

視力障害等級

昭和十一年十一月

扶 扶  
助 助  
料 法  
增 規  
減 改  
調 正  
二  
依  
ル

扶助法規改正ニ依ル扶助料増減調

増加額總計

三二六二五六<sub>円</sub>

遺族扶助料増額ニ依ル増加

一四七四七二

障害扶助料増額ニ依ル増加

九六二六一

最低金額設定ニ依ル増加

二八一四三

障害等級変更ニ依ル増加

四〇四〇二

休業扶助料ノ増加

一三九七八

昭和九年度扶助料總額ニ對スル増加割合 六%

增加額總計

三二六二五六<sub>円</sub>

工場

一〇一、二六一

鑛山

一二六、六五九

勞災法適用事業

(責任保險法適用事業ヲ除ク)

四四六一六

勞災扶助責任保險法適用事業

四二九九〇

官業

一〇、七三〇

傭人扶助令

七、二四七

供給勞働者扶助令

三、四八三

改正案ニ依ル扶助料増減調

(△印減少)

項目	工場	鑛山	勞災法 適用事業	責任保險法 適用事業	官 扶助令	業 計	合計
遺族扶助料	三八七六〇	五八二〇四	二三〇八八	一九三二〇	六三三〇	八一〇〇	一四七、四七三
障害扶助料	二七、三三二	五一、三〇六	七、二九三	九、九六〇	—	五七〇	九六、二六一
休業扶助料	一、三二四	一四、四九六	—	—	△八三二	—	一三、九七八
最低金額	九、一六五	七、一七五	六、七四一	一、七五二	—	三、三一〇	二八、一四三
障害等 其他	三、四八〇	△四、五三二	七、四九四	一、九五八	—	五八二	四〇、四〇二
合計	一〇、二六一	一、二六、六五九	四、六二六	四、三九九	七、四三七	一〇、七三〇	三二六、二五六
現行 補助料	一〇、六三三	一、五九、六五四	二、四六六	二、七六三	三、八八四	四、三〇、四七六	五、四一、二六五
増減率	九五%	七九%	三九%	三七%	二〇%	五七%	六〇%

扶助法規改正ニ依ル扶助料増減調内譯

増加額總計

三二六二五六円

一 遺族扶助料増額ニ依ル増加

一四七四七二円

工場(官營工場ヲ除ク)

三八七六〇

鑛山

五八二〇四

勞災法適用事業(責任保險法適用事業ヲ除ク)

二三〇八八

勞災扶助責任保險法適用事業

一九三二〇

官業

八一〇〇

官營工場

二七〇〇

勞災法適用官業

五四〇〇



二 障害扶助料増額ニ依ル増加

工場（官營ヲ除ク）

鑛山

勞災法適用事業（保險法適用事業除ク）

勞災扶助責任保險法適用事業

官業

官營工場

勞災法適用官業

三 最低金額設定ニ依ル増加

(一) 遺族扶助料

工場（官營ヲ除ク）

九六二六一

二七一三二

五一三〇六

七二九三

九九六〇

五七〇

五七〇

二八一四三

二〇〇〇四

四〇四五

鑛山  
 勞災法適用事業 (責任保險法適用)  
事業ヲ除ク  
 勞災扶助責任保險法適用事業  
 官業

六五一九  
 五六一一  
 一四〇八  
 一四〇一  
 二四二一

(二) 障害扶助料

工場 (官營ヲ除ク)

七三九三  
 五一二〇

鑛山

勞災法適用事業 (責任保險法適用)  
事業ヲ除ク

一三〇

勞災扶助責任保險法適用事業

一三三四  
 一四四三

官業

七四六  
 四

(三) 打切扶助料

官業

七四六

四 障害等級変更ニ依ル増加

工場（官營ヲ除ク）

四〇、四〇二  
二四、八九〇

鑛山

減少 四、五二二

勞災法適用事業（責任保險法適用事業ヲ除ク）

七、四九四

勞災扶助責任保險法適用事業

一、九五八

官業

五八二

五 休業扶助料ノ増加

工場（官營ヲ除ク）

三九、八九八

鑛山

一〇、七九八

二七、一九二

官業

六 休業扶助料ノ減少

工場（官營工場ヲ除ク）

鑛山

官業

一  
九  
〇  
八

二  
五  
九  
二  
〇

九  
四  
八  
四

一  
二  
六  
九  
六

三  
七  
四  
〇

改正案ト現行法トノ比較表

改正

現行労働者災害扶助法ニ依ルモノ  
現行工場法鉱業法ニ依ルモノ

休業扶助料

一、工場鉱山ニ於テ期間ノ區別ニ  
ナク償金ノ百分ノ六十ノ額  
二、工場鉱山ニ於テ独身者ヲ病ニ  
院ニ收容場合ハ百分ノ三十ノ額  
三、期間ノ區別ナク償金  
ノ百分ノ六十ノ額  
四、独身者ヲ病院ニ收容シタル場  
合ト雖モ百分ノ六十ノ額以上

一、工場鉱山ニ於テ障害程度ヲ一  
具體的ニ二十四級ニ細分シ最低  
級ハ償金三十日分最高級ハ  
償金六百日分ノ額トス  
二、障害程度ヲ具體的ニ  
十四級ニ細分シ最低級  
ハ二十日分最高級ハ五  
百四十日分

相象附ニ四号ニ分ツ  
終身雇用ヲ失ハズル能ハザルモノ  
五百四十日分以上終身勤務ニ  
服スル能ハザルモノ三百六十日分  
以上従来ノ勤務ニ服シ得ザ  
ルモノ百八十日分以上従来ノ  
勤務ニ服シ得ルモノ四十日分以上

障害扶助料

一、従来ノ業務ニ服スルコト能ハズル  
トキハ償金百八十日分ヲ下ルモノヲ  
得ザル旨ノ規定ヲ設ク

規定ナシ

オ七條オ三号

障害扶助料

三 最高級賃金六百百分トス  
 最高級三百四十分  
 最高級五百四十分以上

四 工場鉦ニ於テ障害加重場四  
 合ニ付規定ス  
 扶助法施行令ヲ六四  
 條ヲ五項  
 規定ナシ

五 引續キ雇傭スルトキハ雇傭五  
 期間中支給、延期ヲ認ム  
 従来ノ賃金ヲ支給五  
 引續キ雇傭ス場  
 合ハ支給ノ延期ヲ認ム  
 規定ナシ

六 各等級ニ最低金額ノ保障ナシ六  
 同上

七 障害等級ニ適シキル変更  
 ナク  
 ナク  
 ナク

遺族扶助料

一 賃金四百百分トス

二 最低金額(男子三百五十、女子  
 三百)ノ保障ヲ設ク

一 賃金三百六十分

二 最低金額保障ナシ  
 同上

一 賃金三百六十分以上

一 最低金額(男子四百三十、女子一)

二 最低金額ノ保障ナシ  
 同上

以來ナカクテノデアリマス、デ其ノ後東京  
 〇ニ付キマシテモ又私共新ナル觀察ガア  
 スルノデ、其ノ方面ノ意見モ加ヘテ、

リマス、此ノ邊ノ事情ハ佐々木君モ十分御  
 諒察下サツテ居ルモノト存ジマス、併シ只今  
 ノ御演説、御注意モアリ、又大都市市民ノ  
 希望モアレトゴザイマスカラ、精々勉

テ居ルノデアリマス、飽ク迄都長官選ニハ  
 反對ト云フコトノ決議ヲシテ居ルノデアリ  
 マス、ソコデ果シテ市會共ノモノガ都長官  
 選ニ反對デアルカト申シマスルト云フト、

又既ニ數年間ノ年月カ推移シテ居ルノラ  
 リマスカラ、曩ニ公選ヲ主張サレマシク市  
 會議員ガ、來年ノ選挙ニ於ケル政見ニハ官  
 選ヲ御主張ニナスツテモ、ソレハ異ナモノデ

<p>打切扶助料</p>	<p>歸郷旅費</p>	<p>共済組合ニ 關スル規定</p>
<p>二百七十円ノ保障ヲ設ク      工場鉦山ニ於テ「以上」ヲ削リ價ニ      金五百四十日分トス</p>	<p>工場鉦山ニ於テ改正障害等級      〇八級以上ニ設ケスル者ニ支給      ス</p>	<p>工場鉦山ニ於テ事業主及労働者      出捐スル共済組合ノ      爲シタル給付ヲ認ムル規定ヲ      設ク</p>
<p>價金五百四十日分</p>	<p>〇八級以上ノ者ニ      給ス      扶助法施行令ノ十      三條</p>	<p>扶助法施行令ノ十一、規定ナシ      三條</p>
<p>價金五百四十日分以上</p>	<p>〇二等終身自用ヲ年スルコト      能ハサルモノ及ビ〇二号終身      勞務ニ服スルコト能ハサルモノニ      支給ス(改正障害等級表四級      以上ノモノ)</p>	

一工場法施行令中改正ノ件  
右別紙ノ通本院ニ於テ決議上奏候條此段  
及通牒候也

昭和十一年十二月十六日

樞密院議長男爵平沼騏一郎

内閣總理大臣廣田弘毅殿



臣等工場法施行令中改正ノ件  
諮詢ノ命ヲ恪ニ本月十六日ヲ以テ審議ヲ  
盡シ之ヲ可決セリ乃チ謹テ上奏シ更ニ  
聖明ノ採擇ヲ仰ク

昭和十一年十二月十六日

樞密院議長男爵臣平沼騏一郎

勅令第 號

工場法施行令中左ノ通改正ス

第六條中「賃金百分ノ六十以上」ヲ「賃金百

分ノ六十」ニ改メ同條但書ヲ削ル

同條ニ左ノ一項ヲ加フ

職工ヲ病院ニ收容シタル場合ニ於テ

本人ノ收入ニ依リ生計ヲ維持スル者

ナキトキハ休業扶助料ハ賃金百分ノ  
二十トス

第七條 職工ノ負傷又ハ疾病治癒シタ

ル時ニ於テ身體障害存スルトキハ工  
業主ハ別表ニ掲グル區別ニ依リ障害  
扶助料ヲ支給スベシ但シ從來ノ勞務  
ニ服スルコト能ハザルトキハ賃金百

八十日分(其ノ金額男子ニ在リテハ百  
五十圓、女子ニ在リテハ九十圓ニ滿チ  
ザルトキハ夫々百五十圓又ハ九十圓)  
ヲ下ルコトヲ得ズ

別表ニ掲グル身體障害ニ以上存スル  
トキハ重キ身體障害ノ該當スル等級  
ニ依リ障害扶助料ヲ支給スベシ

左ニ掲グル場合ニ於テハ前二項ノ規定ニ依ル等級ヲ左ノ如ク繰リ上グ但シ其ノ障害扶助料ノ金額ハ各身體障害ノ該當スル等級ニ依ル障害扶助料ノ金額ヲ合算シタル額ヲ超ユルコトヲ得ズ

一 第十三級以上ノ身體障害ニ以上

存スルトキ

一級

二 第八級以上ノ身體障害ニ以上存

スルトキ

二級

三 第五級以上ノ身體障害ニ以上存

スルトキ

三級

別表ニ掲グルモノ以外ノ身體障害ヲ  
存スル者ニ付テハ障害ノ程度ニ應ジ

別表ニ掲グル身體障害ニ準ジ障害扶  
助料ヲ支給スベシ

既ニ身體障害ヲ存スル者負傷又ハ疾  
病ニ因リ同一部位ニ付障害ノ程度ヲ  
加重シタルトキハ其ノ加重セラレタ  
ル障害ノ該當スル障害扶助料ノ金額  
ヨリ既ニ存シタル障害ノ該當スル障

害扶助料ノ金額ヲ差引キタル金額ヲ

支給スベシ

第八條中「債金三百六十日分以上」ヲ「債金  
四百日分（其ノ金額男子ニ在リテハ三百  
二十圓女子ニ在リテハ二百圓ニ滿チザ  
ルトキハ夫々三百二十圓又ハ二百圓）」  
ニ改ム



第九條中「賃金三十日分(其ノ金額三十圓ニ滿チサルトキハ三十圓)以上」ヲ「賃金三十日分(其ノ金額三十圓ニ滿チザルトキハ三十圓)」ニ改ム

第十三條第二項ヲ左ノ如ク改ム

障害扶助料ハ職工ノ負傷又ハ疾病ノ治癒後遲滞ナク之ヲ支給スベシ但シ

工業主が引續キ雇傭スル場合ニ於テ  
本人ノ承諾アリタルトキハ雇傭期間  
内障害扶助料ノ支給ヲ延期スルコト  
ヲ得

同條ニ左ノ二項ヲ加フ  
遺族扶助料及葬祭料ハ職工ノ死亡後  
遲滞ナク之ヲ支給スベシ

工業主地方長官ノ許可ヲ受ケタルト  
キハ前二項ノ規定ニ拘ラズ障害扶助  
料及遺族扶助料ヲ數回ニ分割シテ支  
給スルコトヲ得

第十四條中「債金五百四十日分以上」ヲ「債  
金五百四十日分(其ノ金額男子ニ在リテ  
ハ四百三十圓、女子ニ在リテハ二百七十

圓ニ滿チザルトキハ夫々四百三十圓又  
ハ二百七十圓)ニ改ム

第十四條ノニ 工業主豫メ地方長官ノ

許可ヲ受ケタルトキハ工業主及職工

ノ出捐スル共濟組合ノ爲シタル給付

ノ限度ニ於テ之ニ相當スル本令ノ扶

助ヲ爲スコトヲ要セズ

地方長官必要ト認ムルトキハ前項ノ  
許可ヲ取消スコトヲ得

第十八條中「第七條各號」ヲ「別表」ニ改ム

第二十七條中「第七條第一號第二號」ヲ「別  
表第八級以上」ニ改ム

同令ニ左ノ別表ヲ加フ

(別表)

身體障害等級及障害扶助料表

等級	身體障害	障害扶助料
第一級	<p>一 兩眼ヲ失明シタルモノ</p> <p>二 咀嚼及言語ノ機能ヲ廢シタルモノ</p> <p>三 精神ニ著シキ障害ヲ殘シ常ニ介護ヲ要スルモノ</p> <p>四 胸腹部臟器ノ機能ニ著シキ障害ヲ殘シ常ニ介護ヲ要スルモノ</p> <p>五 半身不隨ト爲リタルモノ</p> <p>六 兩上肢ヲ肘關節以上ニテ失ヒタルモノ</p> <p>七 兩上肢ノ用ヲ全廢シタルモノ</p> <p>八 兩下肢ヲ膝關節以上ニテ失ヒタルモノ</p>	<p>賃金六百日分但シ其ノ金額男子ニ在リテハ四百八十圓、女子ニ在リテハ三百圓ニ滿チザルトキハ夫々四百八十圓又ハ三百圓トス</p>

	<p>九 兩下肢ノ用ヲ全廢シタルモノ</p>	
<p>第二級</p>	<p>一 一眼失明シ他眼ノ視力〇・〇ニ以下ニ減ジタルモノ</p> <p>二 兩眼ノ視力〇・〇ニ以下ニ減ジタルモノ</p> <p>三 兩上肢ヲ腕關節以上ニテ失ヒタルモノ</p> <p>四 兩下肢ヲ足關節以上ニテ失ヒタルモノ</p>	<p>債金五百三十日分但シ其ノ金額男子ニ在リテハ四百三十圓、女子ニ在リテハ二百七十圓ニ滿チザルトキハ夫々四百三十圓又ハ二百七十圓トス</p>
<p>第三級</p>	<p>一 一眼失明シ他眼ノ視力〇・〇六以下</p>	<p>債金四百七十日分</p>

第四級

<p>一 兩眼ノ視力〇・〇六以下ニ減ジタルモノ</p> <p>二 咀嚼及言語ノ機能ニ著シキ障害ヲ殘スモノ</p>	<p>ニ 減ジタルモノ</p> <p>二 咀嚼又ハ言語ノ機能ヲ廢シタルモノ</p> <p>三 精神ニ著シキ障害ヲ殘スモノ</p> <p>四 胸腹部臟器ノ機能ニ著シキ障害ヲ殘シ終身勞務ニ服スルコト能ハザルモノ</p> <p>五 十指ヲ失ヒタルモノ</p>
<p>債金四百十日分</p> <p>但シ其ノ金額男子ニ在リテハ三百三十圓女子ニ</p>	<p>但シ其ノ金額男子ニ在リテハ三百八十圓女子ニ在リテハ二百四十圓トス</p>



	<p>三 鼓膜ノ全部ノ缺損其ノ他ニ因リ兩 耳ヲ全ク聾シタルモノ</p> <p>四 一上肢ヲ肘關節以上ニテ失ヒタル モノ</p> <p>五 一下肢ヲ膝關節以上ニテ失ヒタル モノ</p> <p>六 十指ノ用ヲ廢シタルモノ</p> <p>七 兩足ヲリスフラン關節以上ニテ失 ヒタルモノ</p>	<p>在リテハ二百十 圓ニ滿チガルト キハ夫々三百三 十圓又ハ二百十 圓トス</p>
<p>第五級</p>	<p>一 一眼失明シ他眼ノ視力〇・一以下ニ 減ジタルモノ</p> <p>二 一上肢ヲ腕關節以上ニテ失ヒタル モノ</p>	<p>賃金三百五十日分 但シ其ノ金額男 子ニ在リテハ二</p>

第六級

モノ	三 一下肢ヲ足關節以上ニテ失ヒタルモノ	百八十圓女子ニ在リテハ百八十
モノ	四 一上肢ノ用ヲ全廢シタルモノ	圓ニ滿チザルトキハ夫々二百八十圓又ハ百八十圓トス
五 一下肢ノ用ヲ全廢シタルモノ	六 十趾ヲ失ヒタルモノ	圓トス
一 兩眼ノ視力〇・一以下ニ減ジタルモノ	二 咀嚼又ハ言語ノ機能ニ著シキ障害ヲ殘スモノ	債金三百日分但シ其ノ金額男子ニ在リテハ二百四十圓女子ニ在リテハ百五十圓ニ滿チザルトキ
三 鼓膜ノ大部分ノ缺損其ノ他ニ因リ兩耳ノ聽力耳殼ニ接セザレバ大聲		

<p>第七級</p>	
<p>一 一眼失明シ他眼ノ視力〇・六以下ニ減ジタルモノ</p> <p>二 鼓膜ノ中等度ノ缺損其ノ他ニ因リ</p>	<p>四 脊柱ニ著シキ畸形又ハ運動障害ヲ殘スモノ</p> <p>五 一上肢ノ三大關節中ノ二關節ノ用ヲ廢シタルモノ</p> <p>六 一下肢ノ三大關節中ノ二關節ノ用ヲ廢シタルモノ</p> <p>七 一手ノ五指又ハ拇指及示指ヲ併セ四指ヲ失ヒタルモノ</p>
<p>賃金二百五十日 分但シ其ノ金額 男子ニ在リテハ</p>	<p>ハ夫々二百四十 圓又ハ百五十圓 トス</p>

兩耳ノ聽力四十裡以上ニテハ尋常ノ話聲ヲ解シ得ザルモノ

二百圓女子ニ在

三 精神ニ障害ヲ殘シ輕易ナル勞務ノ

リテハ百二十五圓ニ滿チザルト

外服スルコトヲ得ザルモノ

キハ夫々二百圓

四 胸腹部臟器ノ機能ニ障害ヲ殘シ輕易ナル勞務ノ外服スルコトヲ得ザルモノ

又ハ百二十五圓

ルモノ

五 一手ノ拇指及示指ヲ失ヒタルモノ

又ハ拇指若ハ示指ヲ併セ三指以上ヲ失ヒタルモノ

又ハ

六 一手ノ五指又ハ拇指及示指ヲ併セ

四指ノ用ヲ廢シタルモノ

七 一足ヲリスフラン關節以上ニテ失

第八級

<p>ヒタルモノ</p> <p>八十趾ノ用ヲ廢シタルモノ</p> <p>九女子ノ外貌ニ著シキ醜狀ヲ殘スモノ</p> <p>十兩側ノ睪丸ヲ失ヒタルモノ</p>	<p>一 一眼ヲ失明シ又ハ一眼ノ視力〇〇</p> <p>二 以下ニ減ジタルモノ</p> <p>二 頸部ニ著シキ運動障害ヲ殘スモノ</p> <p>三 神経系統ノ機能ニ著シキ障害ヲ殘シ輕易ナル勞務ノ外服スルコトヲ得ザルモノ</p> <p>四 一手ノ拇指ヲ併セ二指ヲ失ヒタル</p>
	<p>賃金二百日分但シ其ノ金額男子ニ在リテハ百六十圓女子ニ在リテハ百圓ニ滿チザルトキハ夫々百六十圓又ハ百</p>

- |         |   |
|---------|---|
| モノ      | 五 一手ノ拇指及示指又ハ拇指若ハ示指ヲ併セ三指以上ノ用ヲ廢シタル              |
| モノ      | 六 一下肢ヲ五種以上短縮シタルモノ<br>七 一上肢ノ三大關節中ノ一關節ノ用ヲ廢シタルモノ |
| ヲ廢シタルモノ | 八 一下肢ノ三大關節中ノ一關節ノ用ヲ廢シタルモノ                      |
| ヲ廢スモノ   | 九 一上肢ニ假關節ヲ殘スモノ                                |
| ヲ殘スモノ   | 十 一下肢ニ假關節ヲ殘スモノ                                |
| ヲ失ヒタルモノ | 十一 一足ノ五趾ヲ失ヒタルモノ                               |

圖トス

第九級

一 兩眼ノ視力〇・六以下ニ減ジタルモ	債金百五十日分
二 一眼ノ視力〇・〇六以下ニ減ジタルモ	但シ其ノ金額男子ニ在リテ八百
三 兩眼ニ半盲症、視野狭窄又ハ視野變	リテハ七十五圓
四 兩眼ノ眼瞼ニ著シキ缺損ヲ殘スモ	ニ滿チザルトキ
五 鼻ヲ缺損シ其ノ機能ニ著シキ障害	ハ夫々百二十圓
六 咀嚼及言語ノ機能ニ障害ヲ殘スモ	又ハ七十五圓ト
七 鼓膜ノ全部ノ缺損其ノ他ニ因リ一	ス

	第十級
<p>耳ヲ全ク聾シタルモノ</p> <p>八 一手ノ拇指ヲ失ヒタルモノ、示指ヲ併セ二指ヲ失ヒタルモノ又ハ拇指及示指以外ノ三指ヲ失ヒタルモノ</p> <p>九 一手ノ拇指ヲ併セ二指ノ用ヲ廢シタルモノ</p> <p>十 一足ノ第一趾ヲ併セ二趾以上ヲ失ヒタルモノ</p> <p>十一 一足ノ五趾ノ用ヲ廢シタルモノ</p>	<p>一 一 眼ノ視力〇・一以下ニ減ジタルモノ</p> <p>二 咀嚼又ハ言語ノ機能ニ障害ヲ殘ス</p>
	<p>賃金百二十日分</p> <p>但シ其ノ金額男子ニ在リテ八九</p>



モノ

三十四齒以上ニ對シ齒科補綴ヲ加ヘタルモノ

四鼓膜ノ大部分ノ缺損其ノ他ニ因リ

一耳ノ聽力耳殼ニ接セザレバ大聲ヲ解シ得ザルモノ

五一手ノ示指ヲ失ヒタルモノ又ハ拇指及示指以外ノ二指ヲ失ヒタルモノ

六一手ノ拇指ノ用ヲ廢シタルモノ示指ヲ併セ二指ノ用ヲ廢シタルモノ又ハ拇指及示指以外ノ三指ノ用ヲ廢シタルモノ

十五圓、女子ニ在

リテハ六十圓ニ

滿チザルトキハ

夫々九十五圓又

ハ六十圓トス

<p>七 一下肢ヲ三種以上短縮シタルモノ        八 一足ノ第一趾又ハ他ノ四趾ヲ失ヒタルモノ</p>	
<p>第十一級</p>	<p>一 兩眼ノ眼球ニ著シキ調節機能障害又ハ運動障害ヲ殘スモノ        二 兩眼ノ眼瞼ニ著シキ運動障害ヲ殘スモノ        三 一眼ノ眼瞼ニ著シキ缺損ヲ殘スモノ        四 鼓膜ノ中等度ノ缺損其ノ他ニ因リ一耳ノ聽力四十種以上ニテハ尋常ノ話聲ヲ解シ得ザルモノ</p>
<p>賃金九十日分但シ其ノ金額男子ニ在リテハ七十圓女子ニ在リテハ四十五圓ニ滿チザルトキハ夫々七十圓又ハ四十五圓トス</p>	

五 脊柱ニ畸形ヲ残スモノ

六 一手ノ中指又ハ環指ヲ失ヒタルモノ

七 一手ノ示指ノ用ヲ廢シタルモノ又

ハ 拇指及示指以外ノ二指ノ用ヲ廢

シタルモノ

八 一足ノ第一趾ヲ併セ二趾以上ノ用

ヲ廢シタルモノ

第十二級

一 一眼ノ眼球ニ著シキ調節機能障害 賃金六十日分但

又ハ運動障害ヲ残スモノ

シ其ノ金額男子

二 一眼ノ眼瞼ニ著シキ運動障害ヲ殘ニ在リテハ五十

スモノ

圓女子ニ在リテ

三 七齒以上ニ對シ齒科補綴ヲ加ヘタ

ルモノ

四 一耳ノ耳殼、大部分ヲ缺損シタル

モノ

五 鎖骨、胸骨、肋骨、肩胛骨又ハ骨盤骨ニ

著シキ畸形ヲ殘スモノ

六 一上肢ノ三大關節中ノ一關節ノ機

能ニ障害ヲ殘スモノ

七 一下肢ノ三大關節中ノ一關節ノ機

能ニ障害ヲ殘スモノ

八 長管骨ニ畸形ヲ殘スモノ

九 一手ノ中指又ハ環指ノ用ヲ廢シタ

ルモノ

エノ脚

ハ三十圓ニ滿チ  
ザルトキハ夫々  
五十圓又ハ三十  
圓トス

第十三級

一 一眼ノ視力〇・六以下ニ減ジタルモ

賃金四十日分但シ其ノ金額男子

十一 一足ノ第二趾ヲ失ヒタルモノ、第二趾ヲ併セ二趾ヲ失ヒタルモノ又ハ第三趾以下ノ三趾ヲ失ヒタルモノ

十一 一足ノ第一趾又ハ他ノ四趾ノ用ヲ

廢シタルモノ

十二 局部ニ頑固ナル神經症狀ヲ殘スモ

十三 男子ノ外貌ニ著シキ醜狀ヲ殘スモ

十四 女子ノ外貌ニ醜狀ヲ殘スモ

二 一眼ニ半盲症視野狭窄又ハ視野變ニ在リテハ三十

狀ヲ殘スモノ  
圓女子ニ在リテ

三 兩眼ノ眼瞼ノ一部ニ缺損ヲ殘シ又ハ二十圓ニ滿チ

ハ睫毛禿ヲ殘スモノ  
ザルトキハ夫々

四 一手ノ小指ヲ失ヒタルモノ  
三十圓又ハ二十

五 一手ノ拇指ノ指骨ノ一部ヲ失ヒタルモノ  
圓トス

六 一手ノ示指ノ指骨ノ一部ヲ失ヒタルモノ

七 一手ノ示指ノ末關節ニ屈伸不能ヲ

來シタルモノ

八 一下肢ヲ一握以上短縮シタルモノ

九 一足ノ第三趾以下ノ一趾又ハ二趾

ノ

ノ

	<p>ヲ失ヒタルモノ</p> <p>十一足ノ第二趾ノ用ヲ廢シタルモノ、        第二趾ヲ併セ二趾ノ用ヲ廢シタル        モノ又ハ第三趾以下ノ三趾ノ用ヲ        廢シタルモノ</p>	
<p>第十四級</p>	<p>一 一眼ノ眼瞼ノ一部ニ缺損ヲ殘シ又        ハ睫毛禿ヲ殘スモノ</p> <p>二 三齒以上ニ對シ齒科補綴ヲ加ヘタ        ルモノ</p> <p>三 上肢ノ露出面ニ手掌面大ノ醜痕ヲ        殘スモノ</p> <p>四 下肢ノ露出面ニ手掌面大ノ醜痕ヲ</p>	<p>賃金二十日分但        シ其ノ金額男子        ニ在リテハ十五        圓、女子ニ在リテ        ハ十圓ニ滿テザ        ルトキハ夫々十        五圓又ハ十圓ト</p>

備考

一 視力ノ測定ハ萬國式試視力表ニ依ル屈折異狀アルモノ

殘スモノ	五一手ノ小指ノ用ヲ廢シタルモノ
	六一手ノ拇指及示指以外ノ指骨ノ一部ヲ失ヒタルモノ
	七一手ノ拇指及示指以外ノ指ノ末關節ニ屈伸不能ヲ來シタルモノ
	八一足ノ第三趾以下ノ一趾又ハ二趾ノ用ヲ廢シタルモノ
	九局部ニ神經症狀ヲ殘スモノ
	十男子ノ外貌ニ醜狀ヲ殘スモノ
ス	



ニ付テハ矯正視力ニ付測定ス

二 指ヲ失ヒタルモノトハ拇指ハ指關節、其ノ他ノ指ハ第一指關節以上ヲ失ヒタルモノヲ謂フ

三 指ノ用ヲ廢シタルモノトハ指ノ末節ノ半以上ヲ失ヒ又ハ掌指關節若ハ第一指關節(拇指ニ在リテハ指關節)ニ著シキ運動障害ヲ殘スモノヲ謂フ

四 趾ヲ失ヒタルモノトハ其ノ全部ヲ失ヒタルモノヲ謂フ

五 趾ノ用ヲ廢シタルモノトハ第一趾ハ末節ノ半以上、其ノ他ノ趾ハ末關節以上ヲ失ヒタルモノ又ハ蹠趾關節若ハ第一趾關節(第一趾ニ在リテハ趾關節)ニ著シキ運動障害ヲ殘

スモノヲ謂フ

附則

本令ハ昭和十二年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行前支給事由ヲ生ジタル扶助ニ付テハ仍従前ノ規定ニ依ル

本令施行ノ際現ニ休業扶助料ヲ受クル者本令施行後引續キ休業扶助料ヲ受ク

ルトキハ本令施行後ハ本令ノ規定ニ依  
リ之ヲ扶助スベシ本令施行前ニ扶助ヲ  
受ケテ治癒シタル負傷又ハ疾病ガ本令  
施行後再發シテ扶助ヲ受クルトキ亦同

ジ

秘

工場法施行令中改正ノ件審査報告

今回御諮詢ノ工場法施行令中改正ノ件ニ付本  
官等審査委員ヲ命ゼラレ本月十日委員會ヲ開  
キ當局大臣及關係諸官ノ辯明ヲ聽キ以テ之ガ  
査覈ヲ遂ゲタリ

工場法施行令ハ大正五年八月初メテ制定セラ  
レタルヨリ以來時々部分的改正ヲ受ケテ今日  
ニ至レルモノナル處近時ノ實績ニ徴シ本令所  
定ノ職工ノ受クベキ扶助金額ヲ若干増額シ且  
之ニ關スル本令ノ條項ヲ整理スルヲ妥當トシ

並ニ昭和十年法律第十九號工場法中改正法律  
ノ新規定ニ伴ヒテ本令ノ條項ヲ修補スベキモ  
ノアルニ由リ茲ニ本件ヲ以テ其ノ現行規定ニ  
一部ノ改正ヲ加ヘントスルモノニシテ其ノ要  
旨ヲ摘録スレバ大略左ノ如シ

(一)職工が業務上負傷シ又ハ疾病ニ罹リ療養ノ  
爲メ勞務ニ服スルコト能ハザルニ因リ賃金  
ヲ受ケザルトキ之ニ支給スベキ休業扶助料  
ニ關シ(イ)現行規程ハ本則トシテ之ヲ一日ニ  
付賃金百分ノ六十以上トシ同一ノ疾病又ハ

負傷及之ニ因リ發シタル疾病ニ付其ノ支給  
 百八十日ヲ超エタルトキハ其ノ後ノ支給額  
 ヲ一日ニ付賃金百分ノ四十迄ニ減ズルコト  
 ヲ得ル旨ノ特則ヲ認メタルモ改正案ハ本則  
 ヲ一日ニ付賃金百分ノ六十トシ右ノ特則ヲ  
 廢シ(四)改正案ニ於テハ職工ヲ病院ニ收容シ  
 本人ノ收入ニ依リ生計ヲ維持スル者ナキト  
 キハ休業扶助料ヲ一日ニ付賃金百分ノ二十  
 トスル旨ノ新規定ヲ設ク(第六)

(二)職工ノ業務上ノ負傷又ハ疾病ノ治療シタル

後身體ニ障害ヲ存スルトキ之ニ支給スベキ  
障害扶助料ニ關シ(イ)現行規程ハ障害ヲ概括  
的標準ニ依リ四級ニ區別シ賃金五百四十日  
分以上乃至四十日分以上ノ範圍内ニ於テ各  
級ノ支給額ヲ定メタルモ改正案ニ於テハ障  
害ヲ身體ノ各部位ニ就キ緻密ナル標準ニ依  
リ十四級ニ區分シ第一級ハ賃金六百日分最  
低額ヲ男子ハ四百八十圓、女子ハ三百八十  
第十四級ハ賃金二十日分(最低額ヲ男子ハ十  
五圓、女子ハ十圓トス)トシ其ノ範圍内ニ於テ

各級ノ支給額ヲ定メ(ロ)改正案ニ於テハ障害  
が從來ノ勞務ニ服スルコト能ハザラシムル  
モノナルトキハ其ノ支給額ハ賃金百八十日  
分(最低額ヲ男子ハ百五十圓、女子ハ九十圓ト  
ス)ヲ下ルコトヲ得ザルモノトシ障害ガ二以  
上存スルトキハ重キ障害ノ該當スル等級ニ  
依リ、其ノ二以上ノ障害ガ第十三級以上ニ該  
當スルトキハ一級乃至三級繰上ゲテ支給額  
ヲ定ムベキモノトシ既ニ障害ヲ存スル者ガ  
業務上ノ負傷又ハ疾病ニ因リ身體ノ同一部



位ニ付障害ノ程度ヲ加重シタルトキハ前後  
ノ障害ノ該當スル扶助料金額ノ差額ヲ支給  
スベキモノトシ(第七表)(ハ)改正案ニ於テハ障  
害扶助料ハ工業主が當該職工ヲ引續キ雇傭  
スル場合ニ於テ本人ノ承諾アリタルトキハ  
雇傭期間内其ノ支給ヲ延期スルコトヲ得ル  
旨ノ新規定ヲ設ク(第二十項三條)

(三)職工ノ死亡シタルトキ其ノ遺族又ハ職工ノ  
死亡當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル  
者ニ支給スベキ遺族扶助料ハ現行規程ニ於

テハ之ヲ債金三百六十日分以上ト定メタル  
 モ改正案ニ於テハ之ヲ債金四百日分トシ其  
 ノ最低額ヲ男子ハ三百二十圓、女子ハ二百圓  
 トシ(第八條)葬祭ヲ行フ遺族其ノ他ノ者ニ支給  
 スベキ葬祭料ハ現行規程ニ於テハ之ヲ債金  
 三十日分以上ト定メタルモ改正案ニ於テハ  
 之ヲ債金三十日分トス(第九條)

(四)療養ノ扶助ヲ受クル職工ガ療養ノ開始後三  
 年ヲ經過スルモ其ノ負傷又ハ疾病ノ治癒セ  
 ザルトキ之ニ支給スベキ打切扶助料ハ現行

規程ニ於テハ之ヲ賃金五百四十日分以上ト  
定メタルモ改正案ニ於テハ之ヲ賃金五百四  
十日分トシ其ノ最低額ヲ男子ハ四百三十圓、  
女子ハ二百七十圓トス(四條十)

(五) 前記ノ工場法中改正法律ヲ以テ追加セラレ  
タル同法第十五條ノ二ハ工業主及職工ノ共  
同出捐ニ係ル共濟組合ニ於テ職工ニ對シ給  
付ヲ爲シタルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ  
工業主ハ更ニ本法ニ基ク扶助ヲ爲スコトヲ  
要セザル旨ヲ規定シタルニ由リ本件ノ同法

施行令ノ改正案ニ於テ工業主ハ豫メ地方長官ノ許可ヲ受ケタルトキハ右ノ共濟組合ノ爲シタル給付ノ限度ニ於テ之ニ相當スル本令ノ扶助ヲ爲スコトヲ要セザル旨及地方長官ハ必要ト認ムルトキハ右ノ許可ヲ取消スコトヲ得ル旨ノ新規定ヲ設ク(條十四)

(六) 本件ノ改正勅令ハ前記ノ工場法中改正法律ト共ニ昭和十二年一月一日ヨリ之ヲ施行スルコトトシ之ニ伴フ若干ノ經過規定ヲ設ク

(附則)

按ズルニ本件ハ近時ノ實情ニ考ヘ竝ニ工場法  
中改正ノ結果トシテ工場法施行令ノ現行規定  
ニ一部ノ改正ヲ加ヘントスルモノニシテ其ノ  
骨子ハ職工ノ待遇ヲ改善スルノ趣旨ヲ以テ之  
ニ對スル各種扶助料ノ支給額ヲ増加シ其ノ他  
之ニ關スル條項ヲ整頓セントスルニ在リテ其  
ノ改正條項ハ概ネ範ヲ勞働者災害扶助法施行  
令ノ規定ニ採ル此ノ改正ニ因リ一面職工ノ待  
遇ヲ改善スルハ可ナルモ他面工業主ノ負擔ニ  
増加ヲ來シ惹テ産業ノ發達ニ惡影響ヲ及ボス

コトナキヤハ素ヨリ顧慮スベキ所ナリト雖當  
 局ノ調査ニ依レバ工場法ノ適用ヲ受クル工場  
 ニ於ケル各種扶助料ノ總計年額ハ昭和九年ニ  
 於テ百六萬二千餘圓ニシテ本改正案ニ依ル其  
 ノ増加見込額ハ十萬一千餘圓ニ過ギズ且當局  
 ニ於テハ曩ニ本件改正規定ノ立案ニ際シ特ニ  
 其ノ要旨ヲ當業者ニ内示シタリトノコトニシ  
 テ即チ本件ノ改正ハ工業主ノ負擔ヲ過重ナラ  
 シメザル限度ニ於テ職工ノ待遇ヲ改善セント  
 スルモノニ外ナラザルガ故ニ其ノ趣旨ニ於テ

之ヲ是認スベク其ノ他本件改正ノ各條項ニ至  
リテハ別ニ支障ノ廉ヲ認メズ仍テ審査委員會  
ニ於テハ本件ハ此ノ儘之ヲ可決セラレ然ルベ  
キ旨全會一致ヲ以テ議決シタリ  
右審査ノ結果ヲ報告ス

昭和十一年十二月十二日

審査委員長

樞密顧問官 櫻井 錠二

審査委員

樞密顧問官 有馬 良橘

樞密顧問官	窪田靜太郎
樞密顧問官	鈴木 莊六
樞密顧問官	石塚 英藏
樞密顧問官	坂本 鈺之助
樞密顧問官	石渡 敏一

施七

樞密院議長男爵平沼騏一郎殿





商甲第九號

起案 昭和十一年五月三十一日

裁可 昭和 年 月 日 施行 昭和 年 月 日

内閣總理大臣

三

内閣書記官長



内閣書記官長



外務大臣

三

陸軍大臣

五

文部大臣

三

逓信大臣

三

内務大臣

五

海軍大臣

五

農林大臣

五

鐵道大臣

五

大藏大臣

五

司法大臣

五

商工大臣

五

拓務大臣

五

別紙兩院ノ議決ヲ經タル製鐵業獎勵法  
中改正法律案ヲ審査スルニ右ハ貴族院

昭和十一年五月三十一日

議長上奏ノ通裁可ヲ奏請セラレ可然ト認ム

上諭案

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル

製鐵業將

勵法中改正法律

ヲ裁可シ茲ニ之ヲ

公布セシム

御名 御璽

昭和十一年五月二十八日

内閣總理大臣

内務大臣

大藏大臣

(宮井納)

商工大臣

法律第三十二號

(上奏ノ通)

貴族院ハ兩院ノ議ヲ經タル  
製鐵業獎勵法中改正法律案  
ノ裁可ヲ奏請ス

昭和十一年五月二十三日

貴族院議長公爵近衛文磨

